

氏名	神谷 千佳 (学籍番号 16DN03)		
学位の種類	博士(看護学)		
学位記番号	26号		
学位授与年月日	2022年3月10日		
論文題目	NICUから在宅移行期における母親の医療的ケア児に対する ヘルスリテラシー展開への支援モデル		
論文審査担当者	委員長	久保田 君枝	教授
	委員	藤本 栄子	教授
	委員	市江 和子	教授
	委員	川村 佐和子	教授
	委員	有菌 信一	教授

論文要旨

【研究背景】

医療的デバイスを必要としながら在宅で日常生活を送る「医療的ケア児」が急増し、2021年には医療的ケア児支援法が制定され、国の重点政策に位置付けられた。医療的ケア児の母親は、医療的デバイスを用いて生命を維持し、児の健康状態を安定させるために、養育期の母親よりさらに、多岐、かつ多量に専門的情報を活用することが必要である。

そこで、情報を入手・理解・評価・活用していく一連のプロセスである、ヘルスリテラシーの展開を支援することが重要であると考えたため、本研究を実施した。

【研究目的】

母親が医療的ケア児を健全に成長・発達を促し、ともに安定的な生活を送るために、母親がNICU (Neonatal Intensive Care Unit ; 以下NICU) から在宅移行期において医療的ケア児に対するヘルスリテラシーのプロセスを明らかにし、ヘルスリテラシー展開の支援モデルを作成することである。

【研究方法】

第1研究：母親がNICUから在宅移行期において、医療的ケア児（人工呼吸器装着児を除く）に対して、情報源を入手した時期と方法、ヘルスリテラシーの実態を明らかにするために、全国の医療的ケア児の母親51名を対象に、無記名自記式質問紙調査を実施し記述統計を算出した。

第2研究：母親がNICUから在宅移行期において医療的ケア児に対して、ヘルスリテラシーのプロセスおよび必要とした支援を明らかにするために、第一研究の対象者のうち承諾を得られた医療的ケア児の母親11名を対象にインタビューし、内容は質的記述的分析を実施した。

上記の第1研究・第2研究の結果を基に、母親がNICUから在宅移行期において医療的ケア児に対してヘルスリテラシー展開への支援モデルを作成した。

【倫理的配慮】

聖隷クリストファー大学倫理委員会（承認番号：19076）と研究施設の倫理委員会の承認を得て実施し

た。

【結果】

第1研究：参加同意者 59 名のうち、最終有効回答は 51 名（有効回答率、86.4%）であった。ヘルスリテラシー（HLS-14）総得点は 40～69 点に分布しており、中央値は 56.0 点であった。中央値以上の得点者は 26 名（51%）であり、中央値未満の得点者は 25 名（49%）であった。ヘルスリテラシー総得点が高値な人ほど、総得点が低値な人と比べ、退院直後に防災・災害情報を有意に取得し（ $p < 0.05$ ）、役所から社会資源情報を入手していた（ $p < 0.05$ ）。さらに、母親のストレス対処情報は、仲間（医療的ケア児の母親）から入手できており（ $p < 0.01$ ）、医療者からも入手していた（ $p < 0.05$ ）。また、調査した 11 項目の中で、母親のストレス対処情報は最も入手できておらず、入手できていない母親ほど、ヘルスリテラシーの下位尺度である伝達のヘルスリテラシー得点が低値であった（ $p < 0.05$ ）。さらに、下位尺度の機能的ヘルスリテラシー得点が低値な人ほど、医療的ケア児の成長・発達に関する一般的情報の入手源はインターネットであり、児の特徴に対応する個別の情報入手までは至っていなかった（ $p < 0.05$ ）。

第2研究：対象人数は 11 名であった。NICU からの在宅移行期を NICU 入院期、退院直後期、生活安定期に分類したのち、ヘルスリテラシーのプロセスを分析した結果、NICU 入院期は【医療者が側にいる中で指示通りに医療的ケアを実施】していたが、退院直後期には新しい情報を入手することで、【生活に合わせたケアの判断に迷う】ようになり、情報活用まで至らないケースが見られ、情報を入手し、理解し、評価し、活用するといったヘルスリテラシーのプロセスが循環せず、情報の評価・活用を出来ず模索していた。さらに、情報入手に戻りヘルスリテラシーのプロセスを何度も繰り返し、様々な経験を経て、生活安定期頃には、円滑にヘルスリテラシーの展開がなされていた。

母親の医療的ケア児に対するヘルスリテラシーの展開について、NICU 入院期は医療的ケア中心の知識や技術に関する情報ニーズが高かったが、退院直後期に予期せぬ出来事が生じ、児の成長・発達の変化から【生活環境に関する新たな情報を入手】をし始め、母親自身がヘルスリテラシーのプロセスを何度も繰り返し、試行錯誤をする中で、生活安定期には、児の成長・発達に関する情報を得ることができ、個人の情報から、地域の支援者に対する情報収集や地域への還元といった集団レベルのヘルスリテラシーへ変化した。

【考察】

NICU から在宅に移行した母親は、多数の情報を支援者から望んでおり（Kenner, 2013）、医療的ケア児は児の疾患や特徴の個別性が強いいため、母親が情報を入手する際に、支援者が情報を共に評価し、母親が自律して情報活用に至ることができるように支援することが重要だと考える。また、本研究のヘルスリテラシーの対象は NICU から退院直後の医療的ケア児であり、母親の情報の入手・理解・評価・活用は、児の生命に影響が大きいため、困難が生じる。さらに、母親は経験がない在宅生活により、【環境変化に伴う混乱状態】にあるため、これらのことを考慮し支援することが重要であると考えられる。

【結論：作成された支援モデル】

調査結果より、NICU から在宅移行期において母親が医療的ケア児に対するヘルスリテラシー展開への

支援の必要性が認められたため、支援モデルを作成した。

1. NICU入院期は、母親の自信と不安に配慮し、自宅生活をイメージした医療的ケアの実施や社会サービスの活用、災害時の対処に関するヘルスリテラシーについて支援する
2. 退院直後期は、母親が環境変化に伴う混乱状態であることに配慮し、在宅生活のギャップや緊急時の対処に関するヘルスリテラシーについて支援する
3. 生活安定期は、児の状態が安定し、母親の心に余裕が生まれる時期であり、児の将来を見越しながら児の発達促進や母親の生活向上のヘルスリテラシーについて支援する

論文審査の結果の要旨

本研究は、母親が医療的ケア児を健全に成長・発達させ、ともに安定的な生活を送るために、母親が NICU から在宅移行期において医療的ケア児に対するヘルスリテラシーのプロセスを明らかにし、量的研究、質的研究から課題が見いだされ、それらを解決するためにヘルスリテラシー展開への支援モデルを作成した。

ヘルスリテラシー展開への支援モデルを作成することは、今後の NICU から在宅移行期における医療的ケア児と母親への看護支援を適切に進める上で役立ち、適切な時期に必要な情報を提供することが可能となり、よりスムーズな在宅移行への支援の一助になると考えられる。在宅移行期に関わる医療者は、母親が適した時期に必要な情報を得てヘルスリテラシーを展開できるように支援することで、母子にとって安定的な生活を送ることができ、医療的ケア児へのケア力の向上に貢献し、子どもが健康に成長・発達していくことに繋がり、ひいては医療的ケア児と母親（家族）の生活の質向上に寄与することが期待できる。本論文の「NICU から在宅移行期における母親の医療的ケア児に対するヘルスリテラシー展開への支援モデル」は具体的に可視化したモデルがないことから、新規性が高く、博士後期課程における論文としての価値があると十分に認められる。また、神谷千佳氏は研究者として、臨床とのネットワークを強化し、看護学の発展に寄与していく計画があることから、今後の研究の発展にも期待できる。

審査において、修正点を助言し、修正された論文について審査委員全員が合格と判断した。

審査委員会は本論文が著者に博士(看護学)の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。